

みんなでおえかき

社会福祉法人 豊岡串毛会 本分保育園
黒木町本分755番地1 0943-42-0221 園長:仁田原優子



ほくた
わした
ちが
がいたよ

本分保育園、年長児クラスのさくら組です！最近、ドッジボールにはまっている子どもたち。寒さに負けず、毎日、外で元気に遊んでいます！
今回は、雪遊びをテーマに“みんなでのおえかき”をしました。雪合戦やソリ遊び、雪だるま作り…と、楽しそうに遊ぶ自分たちの姿を描いた子どもたち。段々と絵が出来上がってくるにつれて気分も高まり、「早く雪降るといいな〜！」「ソリ遊びしたい！」「雪合戦して遊びたいね〜！」…と、友だちとの会話を弾ませながら、わくわくと雪遊びに胸を膨らませていた子どもたちです。なかなか雪を見ることが少ないこの地域…、この冬、雪は積もるかな〜？
本分保育園では、園庭開放しています。いつでも、お気軽に遊びに来て下さいね！

「ママ嫌い！！」
中一の娘から睨まれた。がら初めてこんな言葉を言われた。「ママ早く帰ってきてね」と、いつも甘えていた娘がまさか…と、言葉が詰まってしまった。そういうえば、前はどんなに叱っても次の瞬間はケロッとしていた娘が、最近では叱られた後は部屋に閉じこもることが多い。そして遂に衝撃の言葉を発したのだ。出かけるので急いでいた私

は、動揺を隠し何ともないフリをして出かけた。本当は娘の言葉が胸に刺さって離れなかつた。その日、友達との待ち合わせ場所は久々のキャナルシティ。キャナルの中を歩いていると、行く所々に幼い頃の娘の姿があった。——当時、娘達にせがまれてこのポケモンショップによく行ったな…娘はこのアイスを食べるのが楽しみで…この噴水では夏に兄弟でびしょ濡れになって水遊びをした——と、各箇

所に娘と息子を連れて来ていた遠い日の風景が無意識に蘇っていた。あの頃の娘はあどけなく、一杯私を必要としていた。歩きながら胸がいっぱいになる。数分前に言われた娘の言葉が繰り返される。急に娘が遠いところに行ってしまったようにな気がして涙が出てきた。親なら誰もが通る道であり、成長を喜ぶべきなのかもしれない。しかし、私自身の成長はこれからのようだ。
森 志穂

一年を締めくくる師走が、やって来た。吹く風も身に沁む歳の瀬になると、温かい鍋物の出番である。鍋奉行は妻に任せ、湯気を吹き合い、熱燗が全身に沁み渡り、心まで温かくなる冬もまた良し。
八女川柳会 安達 昇



寒い日は
熱燗がある
鍋がある

今日の山柳

「元気でいいですね」とよく近所の人たちから声をかけられる。走っている姿を見てのことだろう。そうでもないのだが仕方なく「走っているから元気です」と答えている。意味が違うけど、理解されているのだろうか。
50を過ぎてから初めて走ったマラソン。翌日は階段の上り下りが出来ない程強張って2度と走ることはないだろうと思つたマラソン。それが縁となつて私の人生を変えてしまった。コースも10kmからフルマラソンへ、25回連続して出場した大会もある。その他、各地で開催される大会にも、長い距離をゆつくり走るように心掛けています。マラソンは、速い人・遅い人、それぞれのペースによつて自然と集団が形成される。並走するランナーと談笑しながらゴールを目指す。これが長続きする健康マラソンの理想のペース。ウォーキングでは物足りない、味わえない感激がある。
八女走ろう会 徳永 意信

人生・健康が一番 ②

八女の祭り“あかりとちゃっぼんぼん”「地場産まつり」に参加して 八女農業高校
生活科学科3年生と2年生は、新しい感覚の郷土の味を広めるために自作の餅の実習服に身を包み、多くの方に「ふな焼き」を食べていただきました。「ふな焼き」は生地にはうれん草とかぼちゃをペースト状にして混ぜ、それぞれにさつまいものあんを巻いた2種類を作りました。実演では「意外と簡単にできるんですね」「優しい味がするよ」「これなら孫のおやつによかばい」と様々な感想をいただきました。今後は「芋まんじゅう」や「だご汁」「ごろし」にも工夫を凝らし広めたいと思っています。「郷土料理の輪を広げよう！」これが私たちの研究テーマです。

同日、本校システム園芸科3年生がペットボトル「八農高茶」、煎茶、観葉植物、鉢物、花苗・野菜苗、加工品のジャム、焼肉のたれ、お茶クッキー等各学科の生産物を販売しました。販売実習を通してお客様と直接コミュニケーションを図ることができ、とても良い経験となりました。
(八女農みらい館)12月の開館日
4日(火)、7日(金)、11日(火)、14日(金)、18日(火)、25日(火)、28日(金)
毎週火曜日と金曜日の2回定期的に販売しており、販売時間は、10時30分～15時30分です。(※25日(火)、28日(金)の販売時間は10時30分～12時30分です。)多くの皆様のお越しを心からお待ちしています。



「ふな焼き」の実演



販売実習

老々介護 No.8 終の住みかは何処…

憂うつな師走、鉛色の空の下、枯れ葉が木枯しに舞うこの時期は気も滅入りがちです。母は95歳になりました。お蔭様で猛暑の夏も、記録的な7・14豪雨も無事乗り越え、爽やかな秋もひととき楽しむことができました。しかし寒さのせいにか急に体がいうことをきかなくなりました。元気なようでも老いには勝てないのか気力、体力が弱ってきたようです。ベッドの寝起きが思うようにいきません。4～5年前迄は近所に数名同年代の茶飲み仲間がおられたのでお互い行き来して一日過ごしていました。そんな人たちもここ数年、相次いで逝かれたり、入院されたり、施設に入られたりして周りにおしゃべり相手がいなくなりました。
母には6人の弟・妹が近くに住んでいるので毎月のように食事をしたり、温泉に行ったりを楽しんでいましたが、今は各人自分のことで精一杯のようです。
車の免許を返したので買い物や病院通いさえままなりません。そんなおじ、おばの話聞きながらみんな最後は一人になるのかなと考えさせられます。
じいさん、ばあさんが縁側で渋茶をすすり、孫と一緒に日なたぼっこをした昭和30年代の光景は今や夢幻です。
転ばぬ先の杖、私たち夫婦もいずれ世話になるかもしれない介護付有料老人ホームの資料を取り寄せてみました。今はそんな時代なのでしょう。色んな施設が出ています。福岡市にはホテルのように立派なものもあります。入居一時金が何と2,000万円です。いったいどんな人が暮らすのでしょうか。ふところが豊かになり、核家族化が進み、日本人のライフスタイルが激変しました。豊かになった反面、失った代償の大きさを身にしみて感じます。人は多くの人の祝福の中一人泣きながら生まれ、多くの人の涙の中一人で静かに死んでいくのでしょうか。
遺影用 笑い過ぎだと却下され「シルバー川柳」ポプラ社刊 はるお